# 吉隠の猪養の山に伏す鹿の嬬呼ぶ声を聞くが羨しさ

大伴坂上郎女（巻八・一五六一）

## やまと万葉がたり

この歌は、題詞によると、大伴坂上郎女が跡見の田庄にいた時に作った歌です。跡見の田庄とは、現在の桜井市外山付近にあったとみられる大伴氏の田地経営施設で、跡見庄とも呼ばれました。大伴氏の田庄は、跡見の他に竹田（現在の橿原市東竹田町付近）にもあり、いずれも飛鳥・藤原旧京の近郊に立地します。これらは、坂上郎女の父である大伴安麻呂が壬申の乱の勲功などにより賜った所領と考えられ、安麻呂の妻である石川郎女が大刀自（家政をつかさどる女性）としてその経営に携わり、後には安麻呂と石川郎女の子である大伴稲公や坂上郎女らが田庄の経営を引き継ぎました。坂上郎女の自宅は平城京北郊の坂上里にありましたが、秋の収穫期には数カ月にわたって跡見や竹田の田庄に滞在していました。

歌の内容は、跡見の東の山から聞こえてきた雄鹿が雌鹿を呼ぶ鳴き声に、奈良の自宅を遠く離れて田庄に滞在している自らの孤独を重ねたものです。鹿の鳴き声が聞こえたという吉隠（現在の桜井市吉隠付近）は、初瀬川の支流である吉隠川の源流一帯に当たり、跡見からは東へ約7キロ離れています。吉隠の地は、大和盆地から東へ長く延びる初瀬の谷の行き止まりに当たります。また、『万葉集』巻二には、恋人の但馬皇女に先立たれた穂積皇子が皇女の葬られた吉隠の猪養の岡に思いをはせた歌（二〇三）が見え、志貴皇子の妻である紀橡姫の墓も吉隠にあるなど、皇族や貴族の葬地でもありました。こうしたことから、山に隠れた寂しい土地という吉隠の印象が生じたとみられます。山中から声を響かせた鹿の姿は跡見庄からは見えなかったはずですが、寂寥感を呼び起こす吉隠の地が寂しげな鳴き声を発する鹿のすみかにふさわしいと坂上郎女は考えたのでしょう。

（県立万葉文化館主任研究員・竹内亮）

**【訳】吉隠の猪養の山に伏している鹿が妻を呼ぶ声を聞くのは心ひかれることだ。**

# やまと万葉がたり

## 暮に逢ひて　朝面無み
## 隠野の　萩は散りにき　黄葉早続け

縁達師（巻八・一五三六）

街路樹の葉も散る時期になり、秋の深まりを感じます。今回の歌は季節ごとに分類されている『万葉集』巻八の「秋の雑歌」に収められている一首です。作者の縁達師について伝わっているのは作者名とこの歌だけです。作者名の「縁」が百済系の姓であるとする説や、「縁達」が僧名で「師」は法師であるという説などがあります。

さて、1句目、2句目の夕方に男性の訪れがあった女性が朝に恥じらって顔を隠すという部分は、地名「名張」を導く序になっています。名張は三重県の地名で、隠れる意の「なばる」と発音が類似することから連想された序です。他に「沖つ藻の」という枕詞もあり、同様に海中の藻は見えないことから「隠」を導きます。今回の歌の出だしは「沖つ藻の」よりロマンチックですね。

この表現には前例があり、天武天皇の子・長皇子が702年に詠んだ「暮に逢ひて朝面無み隠にか日長き妹が廬せりけむ」（巻一・六〇）を参考にしたと考えられます。長皇子は名張で仮宿りをしていた女性を詠みましたが、今回の歌では萩と黄葉が詠まれています。なお、『万葉集』では多くが「紅葉」ではなく「黄葉」と書かれており、中国の書物からの影響が指摘されています。

萩は『万葉集』で最も多く詠まれた植物として知られ、とりわけ奈良時代に好まれました。140首以上に詠まれ、秋の景物の代表といえます。ついで黄葉が多く、80首ほどあります。春の花と対になるのが秋の黄葉です。

愛でるべき萩は散ってしまった、早く黄葉が続いてほしい、という歌はちょうど今ごろの時期にあたります。本格的な紅葉が楽しみですね。

（県立万葉文化館主任研究員・阪口由佳）

**【訳】**宵に男と逢って朝は恥かしさに顔を伏せる――。隠野の萩は散ってしまった。黄葉よすぐ続け。